

令和２年度 土佐国分寺跡 第五次寺域確認調査

現地説明会資料

記者発表 令和２年 12 月 11 日（金）午前 11 時～12 時

現地説明会 令和２年 12 月 13 日（日）午前 11 時～12 時

1. 調査に至る経緯

史跡土佐国分寺跡は、天平 13（741）年、聖武天皇の「国分寺建立の詔」を受けて国ごとに建てられた古代寺院の一つで、現在の第 29 番札所国分寺を中心とした範囲が大正 11 年 10 月 12 日に高知県初の国史跡に指定されています。指定当初は古代の寺域は南北 4 5 0 尺（約 1 3 6 m）、東西 5 0 0 尺（約 1 5 0 m）と考えられていました。

その後、昭和 52 年から幾度もの発掘調査が行われ、金堂跡や僧房跡と考えられる建物などが見つかっており、史跡範囲外にも寺域が広がることが分かりました。

こうした成果をもとに、南国市教育委員会では、平成 28 年度から寺域を明らかにするための調査を開始しました。過去 4 年間の調査では、史跡範囲より約 60m 北側から築地塀の痕跡を確認し、南北約 1 9 8 m、東西約 1 5 0 m の範囲が伽藍地として築地塀で囲まれていたと考えられます。さらにその周辺部にも遺構が広がっており、北側は現在の北前川に沿って寺域北辺の溝が掘られていました。今回の調査は、昨年に引き続いて寺域の広がりについて情報の少ない東側と南西側を調査しました。

2. 発掘調査の概要

所 在 地	南国市国分字奥ク他
調査目的	範囲内容確認のための学術調査
調査主体	南国市教育委員会
調査期間	令和 2 年 10 月 3 日～令和 2 年 12 月末（予定）
面 積	234 m ²

3. 調査の成果

◎国分寺東側から中世の鍛冶関連遺物が多数見つかりました。

金堂から約 150m 東側の調査区では、中世の遺構・遺物が多く見つかりました。特に、調査区西端の遺構からふいごの羽口や鉄滓など鍛冶関連の遺物が多数出土したことから、中世にはこの周辺に鍛冶工房が置かれていたことが分かりました。

また、東端の調査区では、谷状に落ち込んだ旧地形が確認でき、水田耕作のために中世以降に造成したことも明らかとなりました。



写真 1 出土したふいご羽口

◎国分寺南西側で国分寺創建頃の多くの遺構・遺物が見つかりました

国分寺南西側では古墳・奈良・平安時代から中世にかけての多量の土器が出土しました。特に、奈良時代の土器は国分寺創建前後の時期にあたるもので、国分寺の成立を知る上で重要な遺物です。コップ型の須恵器や円面硯、大型の杯・蓋など一般集落では見られないものが数多く含まれています。

また、古代の遺構を見ると、方形の柱穴を持つ建物跡が複数棟見つかりました。ほとんどの建物跡は、方位や柱筋を揃えており、規格性をもって整然と建ち並んでいたことが分かりました。国分寺伽藍中心部の施設の多くは真北から約 7° 東に傾いた方位で作られているのに対して、この区域では 2 ～ 3° 東に傾いた方位でそろえており、時期差による違いがあるようです。

こうしたことから、この区域に創建期の国分寺の運営に関わる施設が置かれていた可能性が高いと考えられます。

このように、今回の調査によって国分寺関連施設の配置について大きな成果を上げることができました。

4. まとめ

これまでの 5 年間にわたる調査によって、国分寺周辺の広大な範囲に古代・中世の施設が広がっていたことが明らかとなりました。全国 60 以上ある国分寺の中でも、寺域全体の様相が分かっている例はあまり多くありません。しかも、古代の創建から中世、そして現代への変遷がたどれることは土佐国分寺の大きな特徴です。また、これまでの調査で確認された古代の遺構は現在の地割に沿っており、国分寺の創建によって形成された区割りが古代から中世、現代まで大切に受け継がれてきた結果残った貴重な歴史的景観と言えます。

これまでの調査で寺域に関する情報が蓄積されてきたため、今後、有識者の意見を聞きながら古代国分寺の本来の姿を明らかにしていきたいと考えています。

調査にあたっては、地権者の方をはじめ、多くの方々に多大なるご支援・ご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

今後とも文化財調査へのご理解・ご協力をお願いいたします。



写真 2 出土した円面硯脚部

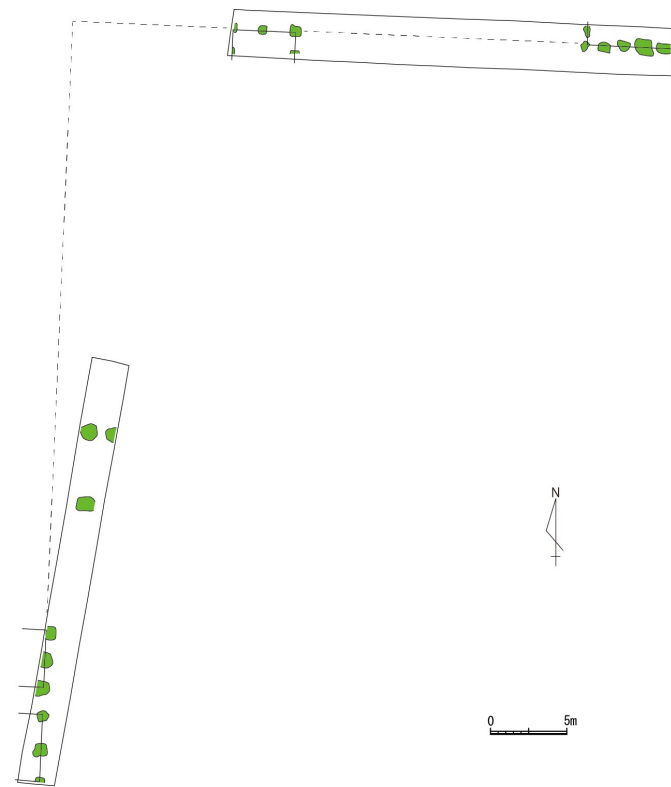


図 1 南西部古代建物配置模式図

